

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

少女

いつの間にか彌兵衛とその家族は、川の流れを対岸から見つめ合う人々のように、お互いの心の中を見えにくいものにしていったのだ。

いくら出家の身とは言え、やっと、体一つが入る程の小さな作業小屋で、暑い夏や寒い冬を過ごすことは、家族が心を痛めるだけでなく、彌兵衛自身、老いた身に良いはずはなかった。けれども、彌兵衛は敢えて、その道を選んだ。暗い闇の中で、彌兵衛は、動物の気配や音にさえ怯えた。彌兵衛は、たまらなく孤独を感じた。

——住職の言った「何ごとが有っても動じない心」をほんとうに持っている人が居るのだろうか。——

——クニや勘六、五郎太は、今頃、何をしているのだろうか。——

彌兵衛は、小屋の中に迷い込んだコオロギにさえ語りかけた。

無の心に近付こうと、考えれば考える程、煩惱の数は増えた。

彌兵衛の顔付きは、日を追うにしたがって陰しくなり、村の人々は、

「周藤の旦那さんも変人よのお」

「頭を丸め僧になりなさったと言うが、このごろは、よけいに近寄りがたい」



画 寺戸良信

などと言い、工事現場の近くを避けて通った。

クニが時折、彌兵衛の身を案じて、そっと物陰から彌兵衛を見つめていたことなど、無論、彌兵衛は知る由も無かった。

彌兵衛が唯一人で岩を削り始めてから、早くも六年の歳月が過ぎ去ろうとしていた。

一年前の冷夏に比べ、この年は、雨期でも雨が降らず、真夏の太陽は容赦なく地面を照らし、旱魃による農作物への影響が心配されていた。

彌兵衛は、滴り落ちる汗を首から掛けた薄汚い手ぬぐいで拭い、意宇川の水面を見下ろして溜息まじりに呟いた。

「川幅もさることながら、川底も、もう少し掘り下げなくてはならんな」

もう、何日も雨を見ない意宇川の流れは、すっかり細くなり、岩の上からでも川床が見えた。暑さのため、目眩を起こしそうになり、彌兵衛は体を低くし、岩の上に手をついた。

その時、彌兵衛の目は、こちらに向かって懸命に手を振っている小さな人影を捕えた。

「はて、さて、わしに手を振る者が居るとは考えられんが……。しかし、こっちの方角には、わし他には誰もおらん」

彌兵衛は辺りを見回した。

「何やら振りかざして、叫んでおるようじゃ。どうやら子供のようじゃのう」

彌兵衛は、一瞬ためらったが、岩山を下り始めた。

「おじいさま——。おじいさま——」
少女は叫んだ。